

言語過程説から認知言語学へ

コミュニケーション手段としての言語の特質を探るために

ろう学校教師のための言語学入門〈5〉

2006.4.6 矢沢国光

コミュニケーションの手段としては、言語と非言語がある。非言語の中には、身振り、表情、姿勢のように、言語ではないが、話し手の気持ちを、話し手自身が、その身体運動によって、直接に表現する手段がある。そのほかに、イラスト・写真・具体物を指し示したり、状況・場面に依拠した伝達もある。そうしたさまざまなコミュニケーション手段——伝達戦略——の中で、言語という手段の持つ特質——非言語的手段と区別される特質——は、いったい何なのか。

言語は、より確実に効果的な伝達を実現するために、言語自体の中にどのような仕組みをもっているのか。

こうしたことを解明するには、どうしたらよいか。その方法について、考える。

1. 二つの言語観

前回、コミュニケーションについての二つの見方を取り上げた。「メッセージ・コード伝達モデル」と「会話モデル」である。

「メッセージ・コード伝達モデル」とは、一口に言えば、話し手のメッセージが、言葉という記号に姿を変えて（コード化）話し手に届けられる、というモデルである。ここにおいて、言語は、音声（または文字）と意味が結合したものであり、話し手・聞き手といった個々の人間の外側に、社会的実在として、あるものと考えられている。

これに対して、コミュニケーションの「会話モデル」とは、話し手が聞き手に対して投げかけたボール（言葉プラス非言語の発信）を、聞き手が自分の「状況」として受け止め、次には自分が話し手となって、ボールを投げかえす、…という連鎖の過程ととらえる。この場合、話し手の発信した言葉の「意味」とは、聞き手の対応——聞き手による言葉の「意味づけ」行為——そのものであり、言葉それ自体の中に「意味」が存在するのではないと、考えられる。

聴覚障害児の言語発達を身近に観察し、かつ支援する立場にいるわたしたち聾学校教師にとって、こうした二つのコミュニケーションモデルのうち、いずれが納得しうるものかといえば、「会話モデル」である。なぜなら、コミュニケーションと子どもの言語獲得に関する、聾学校教師の、以下のような直感は、コミュニケーションの「会話モデル」と親和的だからである。

「言葉は、子どもが自ら、環境との関わり——広義のコミュニケーション——の中で獲得していくものであり、コミュニケーションから離れた場所で、教えることはできない」

「言語は、コミュニケーションの一つの手段であり、言葉を使うコミュニケーションも、

言葉だけで成り立つのではなく、コミュニケーションは、言葉と言葉以外のもの（非言語的手段・要因）が協働して、成り立つ。」

コミュニケーションについての、こうしたとらえ方のちがいは、言語についてのとらえ方——言語観——のちがいに基づく。

「メッセージ・コード伝達モデル」の言語観は、「近代言語学の祖」と呼ばれるフェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857年 - 1913年）の言語観に代表される。ソシュールは、言語学の対象として、人の個別具体的な言語活動そのものではなく、個人的な言語活動から抽出される言語記号——意味と聴覚印象（または文字）が結合したもの——の社会的な体系として「ラング」を設定した。個人的・主観的な要素の入り込む言語活動（ソシュールは「パロール」と呼んだ）から離れたラング——客観的な存在としての「言語」——を想定することによって、はじめて、言語の「科学的な」分析が可能になる、と考えたのである。

ソシュール以降の「近代言語学」は、ラングの設定を出発点として、会話→文→単語→形態素→音素のように、ラングの構成要素を次々と下位のレベルに掘り下げ、単位要素を析出していった。また、そうした単位要素の結合関係を支配する法則としての「文法」の抽出に向かっていった。チョムスキー派の生成変形文法も、その延長線上にある。

こうした、ソシュールの切り開いた——ある意味では自然科学的な方法による——分析は、言語の形式面の解明については、めざましい成果を上げた。音韻論、形態論、統語論といった分野である。

だが、肝心の「言葉の意味」については、無力であった。現実の個別具体的な会話の中に生ずる「意味」は、ラングをいくら分析しても、出てこなかったのである。

このことは、じつは、言葉の形式面についての成果——音韻論、形態論、統語論——も、致命的な限界をもっていることを意味する。なぜなら、ソシュールの「ラング」の諸要素——形態素、語、文——は、もともと、意味と形式（聴覚印象または文字）とが結合した単位として想定されたものであるが、肝心の「意味」についての規定が不可能ならば、「ラング」という理論仮説自体が崩壊してしまうからである。

これに対して、「会話モデル」の言語観は、どのようなものであろうか。「会話モデル」の言語観は、言語をあくまで、個別具体的な会話の中に、つまり話し手・聞き手のコミュニケーション活動の中に、見出す。言葉を話す・聞く・書く・読むという行為そのもの、そしてそれに伴う話し手・聞き手の認知的心理的過程そのものが言語であると考える。

このような「会話モデル」の言語観は、言語観としては、非常に魅力的であるが、その言語間に基づいて、実際に、コミュニケーションなりそこで使われる言葉なりを、どのように解明していつたらよいのか。私たちがこれまで読んできた言語学の本のほとんどは、音韻論、形態論、統語論、…といった「メッセージ・コード伝達モデル」の言語学であり、「会話モデル」の言語学には、はなはだ、なじみが薄い。

だが、じつは、こうした課題を、すでに半世紀以上前に追求した言語学者（国語学者）がいた。国語学者・時枝誠記（ときえだ もとき）博士である。

2. 時枝氏のコミュニケーション論と「言語過程説」

時枝氏は、言語を次のようにとらえ、「言語過程説」と名付けた（時枝誠記、国語学原論・続編、1955 岩波書店）。以下は、矢沢の要約である。

- 1) 言語は、思想の理解・表現である。思想の表現・理解過程そのものが、言語である。
- 2) 言語は、（絵画・音楽等さまざまな表現・理解がある中で）、音声（発音行為）または文字を媒介とする表現・理解過程である。
- 3) 言語は、言語主体の実践的行為、活動としてのみ、したがって、個人においてのみ、成立する。
- 4) 言語行為の成立条件は、話し手、聞き手、素材（話題、語られるもの）の三者である。
- 5) 言語行為の形態としては、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」の4形態がある。それぞれの行為には、技術が不可欠である。
- 6) 言語の研究は、言語を行為実践する主体的立場を観察すること（観察的立場）である。

時枝氏の言語観が、「会話モデル」の言語観とそっくり同じであることに、驚かされる。

時枝氏は、ソシユール言語学を、それが日本に輸入され始めた当初から、真っ向から批判し、言語を「会話モデル」的に考えていた。

時枝氏曰く。「言語過程説は、言語を人間行為の一つとして観察し、すべてを、言語主体の機能に還元しようとする学説である。言語学は、久しい間、言語を自然科学的類推において、それ自身、生活し活動する有機体のごとく見てきた。ソシユールは、言語を概念と聴覚映像との結合体とし、それは脳髄中に在所を求めることができる心的実在であるとした。…言語学を自然科学に近づけることは、厳密な法則定立のためには、プラスになったであろうが、そのために、言語の実際的な面に、目を覆わしめた事実のあることは、否定できないのである。」

つまり、時枝氏は、言語をコミュニケーション手段として、とらえており、その点において、われわれと同じ立場であった。

時枝氏の「国語学原論続編」の「各論」は、「言語による思想の伝達」つまり、コミュニケーション論からはじまっている。

時枝氏は、言語的コミュニケーションの特質として、次の諸点を指摘する。

1. 話し手甲から聞き手乙に受け渡されるものは、空間を經由してくる音声、文字だけ

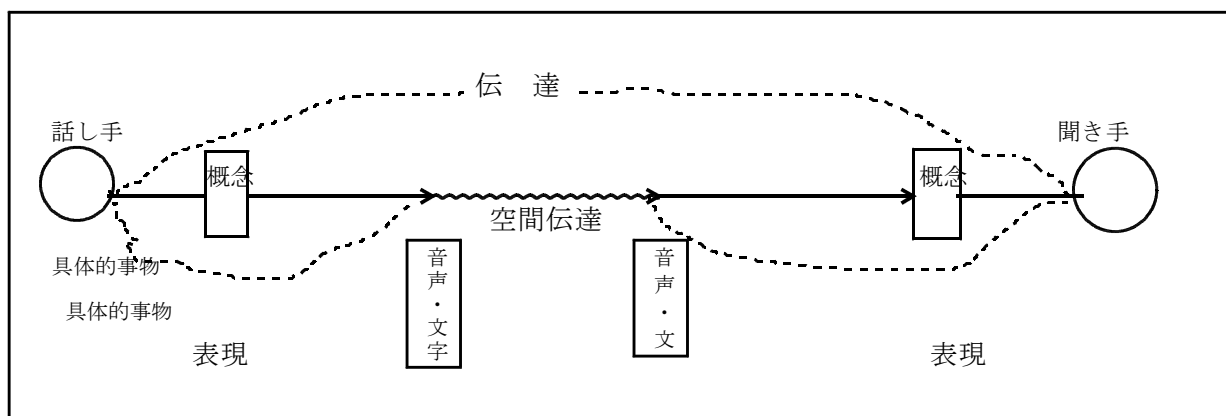
であって、話し手から思想そのものを受け渡されるのではない。[図参照]。

2. 言語は、個物を個物としてそのまま表現するものではなく、常に、**個物を概念的認識を通して、これを一般化して表現する。**

3. その概念を音声あるいは文字に移行して聞き手の感覚を刺激する。

4. これらの刺激からある思想を再生するのは、**全く聞き手の連合作用に依存するもの**であって、話し手の思想が、聞き手に伝達される保証というものは、**言語それ自体には存しない。**

5. 話し手は、聞き手に自分の思想を正確に伝えたいと思って、具体的事物を描写したりして概念規定を加えるが、言語による描写がどこまで通ずるかは、**聞き手読み手の経験に依存している。**これは、言語の宿命である。



3 言語過程説の日本語論

時枝氏の言語過程説に基づく国語学説は、「コミュニケーションにおける日本語の役割」についてさまざまなヒントを提供してくれる。その中から次の三点について、時枝氏の日本語研究の意義と課題を確認しよう。

3-1 「個別の事物を概念的に表現する」ということ

時枝氏は言う。

「伝達の成立を困難にするさらに一つの理由は、言語は、表現の素材である個物を、個物として表現するものではなく、常に、個物を概念的認識を通して、これを一般化して表現するものであるということである。」(国語学原論続編 31 p)

概念的・一般的な表現がなぜ伝達を困難にするのか。話し手が表現する「個物」と、聞き手がその言葉を聞いて思い浮かべる「個物」とは、別個のものだからである。

時枝氏の示す例をそのまま借りて説明すれば、甲が乙に対して「庭の桜が咲きました」と言うとき、甲は、「自分の家の庭と桜」をイメージしている。ところが、乙は、甲の家の庭も桜も見たことがない。乙は、概念としての庭と桜を——せいぜい自分が、「かつてあるところで見えた庭と桜のイメージ」を——想起するだけである。

今日ならば、甲は、「庭の桜」を携帯電話のカメラで撮って、メールに添付して乙に送

することもできる。乙は、甲の家の庭と桜そのものを、写真で見ることができる。言葉による伝達は、個物（自分の家の庭の桜）を、写真のように、個物として伝達することは、できない。

個物を個物として表現するとは、上述の写真もそうであるが、例えば

A （皿の上のショートケーキとチーズケーキを指して）どっちがいい？

B （ショートケーキを指して）こっちがいい。

と、表すときのBの指さしも、個物を直接に伝える。

もう一つ、別の例を考えてみよう。

(1) A ズボンの折り返しは、どのくらいにしますか？

B 〔親指と人差し指で長さを示して〕このくらいにしてください。

は、個物（寸法）を個物として（その寸法を表す身振りを使って）表現するものであり、

(2) A ズボンの折り返しは、どのくらいにしますか？

B 3 c mくらいにしてください。

は、個物（寸法）を概念化・一般化して（c mという長さの単位を使って）、表すものである。

身振りと言語の違いは、「身振りは、個物を個物として表す」のに対して、「言語は、個物を概念化して表す」ことにある。（註）

（註）三浦つとむは、『日本語はいかなる言語か』（講談社学術文庫）で、「釣った魚はこれくらいだった」と、両手を広げて示す身振りは、個物の個物に即した表現であり、言語ではない、と述べている。

症状をお医者さんに伝えるときのことを、考えてみよう。体調の不全は、まさに自分の個別的具体的な事象である。自分の個別的な実感をどうやってお医者さんに伝えればよいか、苦勞する。「おなかが痛くて、気持ち悪い」などと、「痛い」とか「気持ち悪い」という一般的な言葉で表現するしかない。「しくしく痛む」とか「きりきり痛む」とか、修飾語を補うが、この「きりきり」も「しくしく」も概念的なとらえ方である。

時枝氏は、「個物を概念的認識を通して、これを一般化して表現する」という言語の特質を「だから伝達は困難だ」と、伝達の成立困難性の原因として指摘した。

だが、言語表現の概念的・一般的性格は、同時に、**言語による社会的集団的伝達の可能性の基盤**ともなっている。

言語は個人的な行為であるが、同時に、（コミュニケーションはかならず他の人との間に行われるものであるという意味では）社会的集団的な行為でもある。したがって、個人がコミュニケーションに使用する「言葉」は、（個人がその都度勝手に作り出すということもときにはあるが）、一般的には、先人（その言語共同体の他のメンバー）がすでに使っている言葉を使用する。つまり、先人がある事物を表現するのに用いた言葉を、それに似たような事物に援用して、使用している。世の中に「辞書」というものが存在するのは、

そうした先人の「言葉使用の用例集」が重宝されるからである。(このことについては、連載第3回目に述べた)。

くり返すと、言葉(語彙)は、社会的に共用されており、従って、個々の話し手による個物の表現でありながら、個々の話し手がそれぞれ別の言葉を使用しているわけではない。

※「言葉の共用」ということがどうして成立するのか。「言葉の共用」と「言葉の概念性」とは、どのような関連があるのか。後に、改めて、取り上げたい。

言語は、個別の事物を概念的・一般的に表現する。

個別の話し手による個物の表現は、すなわち、**言語の個別的な側面**である。

個物を概念化して一般的に表現する——しかも、社会的に共用されている言葉を使って——のは、すなわち、**言語の社会的な側面**である。

だから、「言語は個物を概念的・一般的に表現する」とは、言い換えれば、言語は社会的であると同時に個別的でもある、という矛盾した性質を持っているという事実の確認である。

3-2 詞と辞——客体的表現と主体的表現

言語を「個人の心理的過程そのもの」と捉える言語過程説にあっては、言葉は、事物を客観的にとらえるだけでなく、話し手がその事物をどのようにとらえ、また、聞き手に対してどのように伝えたいのか——話し手の立場、主観(心のはたらき)——を表現するものと、見なされる。

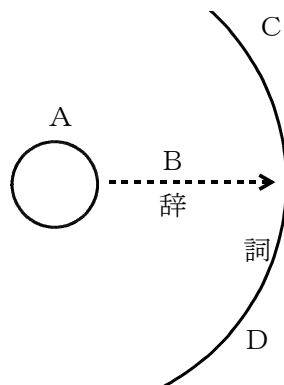
言葉は、事物について表現する(素材)と同時に、話し手の気持ちを表現する(陳述)、という考えは、言語を話し手・聞き手の具体的な行為として——コミュニケーションとして——観察すれば、明らかになることである。ところが、言語をコミュニケーションの過程から離れた「ラング」として観察した場合、話し手・聞き手の心理的過程は捨象され、素材・陳述の対立は、「統語論」の中に埋もれてしまう。

時枝氏の言語過程説にあっては、徹底して、言語をコミュニケーションの過程と捉える故に、話し手・聞き手の「主体的立場」がどのように言葉として表現されるか、これを日本語研究の中心に据えることとなった。

時枝氏の「日本語の素材・陳述」論の特徴は、客体的な表現は「詞(し)」によって、主体的表現は「辞(じ)」によって、別個の語群によって担われる、としたことである。

時枝氏の日本語論は、「国学」の伝統の中で形成された「詞と辞」論を継承している。時枝氏は、伝統的な「国語研究」の中に、「詞と辞の分業」を見出し、「詞辞」論を日本語解明の中心に据えたのである。

時枝氏は、「花よ」という、ごくかんたんな文を例にとって、詞と辞のちがいを、次のように、説明している(時枝、国語学原論 237頁)。



「花よ」において、客体界を表す「花」は詞であり、感動を表す「よ」は辞である。

言語主体を囲む客体界 CD (花) と、それに対する主体的感情 AB (よ) との融合したものが主体 A の直感的世界 (花よ) である。

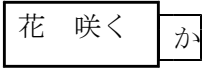
客体界 CD (花=詞) を主体 AB (よ=辞) が包む、という関係になる。

主体が客体界を包む機能は、主体の総括機能といってもよい。日本語の場合、この総括機能

は、「辞で (詞を) 包む」という形で行われている。これを「風呂敷型統一形式」と言って、印欧語の、「A is B」のような「天秤型統一形式」と著しい対称をなす。

もう一つ例を挙げれば、

文「花咲くか」において、「花咲く」という客観的事実を表す言葉 (詞) を、疑問の「か」 (辞) が包む。包む、という関係を、時枝氏は、次のように図示する。



では、どのような語が詞として用いられ、どのような語が辞として用いられるのか。時枝氏は『日本文法口語編』(岩波全書)において、日本語を、詞と辞に分類している。名詞、動詞、形容詞、副詞等は、詞の部類である。接続詞、感動詞、助動詞、助詞は、辞の部類である。このことについては、これ以上立ち入らない。

ここでは、むしろ、「風呂敷型統一形式」が「入れ子型構造」になることを見ておく。

「梅の花が咲いた」は、次のような入れ子型構造になる。

「梅」(名詞、詞) を「の」(助詞、辞) が包む。「梅の花」(名詞句、詞) を「が」(助詞、辞) が包む。「梅の花が咲く」(客体界の表現、詞) を「た」(助詞、辞) が包む。このようにして、次々に辞で包まれる、入れ子型構造になる。



これは、日本語の「文末表現」の持つ重要性を知る上で、有力な手がかりになる。文末の「辞」は、文全体を入れ子型構造によって統括する機能を持っており、話し手の意図・意志・気持ちが総括的に、文末表現に込められているとみてよい。

連載第一回で、岩城謙『聴覚障害児の言語とコミュニケーション』に言及した。岩城は、その中で、子どもの一語文、二語文、慣用文という言語発達について述べているが、岩城

が言語発達のメルクマールとしているのも、「素材的意味」と「陳述的意味」の表現の発展である。

(素材的意味)	(陳述的意味)
学校へ行	こうよ。
学校へ行	きなさい。
学校へ行	くか。
学校へ行	くぞ。
学校へ行	くだろう。
学校へ行	くのかしら。
学校へ行	くそうだ。

において、「学校へ行く」が「素材的意味」で、これは上の七つの文において、共通している。これにたいして、線の右側の「～こうよ」「～きなさい」…は、話し手の判断や意志、伝達の意図などを表す「陳述的意味」である。話し手の言葉には、かならず、素材的意味と陳述的意味がある、と岩城は言う。岩城の「素材的意味」「陳述的意味」は、時枝氏の客体的表現と主体的表現に相当する（*）。

（*）ただし、岩城氏は、格助詞については、陳述的表現とは区別して、「素材関係の意味」とする。陳述的意味と素材関係の意味の二つをあわせて「文法的意味」とする。

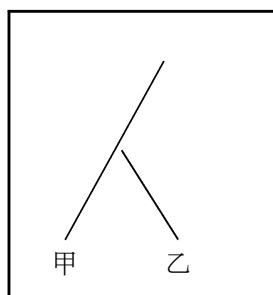
病院から学校へ行く。

学校から病院へ行く。

において、「病院」「学校」「行く」の三語の単語同士の関係は、格助詞「から」「へ」によって表され、それによって、「素材関係の意味」を作り出す。岩城氏の、格助詞によって形成される「素材関係の意味」は、時枝氏の「素材的意味」の一部とすることになる。

「辞」が話し手の主体的な立場を表す、というならば、格助詞は、なぜ「詞」ではなくて「辞」なのか。

時枝氏は、格助詞について、次のような例を挙げて、格助詞が「辞」であることを、わかりやすく説明している。



左図において、
「甲が乙によりかかっている」
というか
「乙が甲を支えている」
というかは、話し手の認定の仕方にかかっている。だから、「が」「に」「を」という助詞は、関係の概念的表現ではなく、事柄そのものに対する認定の直接的表現であるといえる。

つまり、「甲が乙によりかかっている」という文と「乙が甲を支えている」という文は、いずれも、同一の図であらわされる関係について述べたものであるが、意味が同じではな

い、ということだ。これは、地下鉄駅の改札階と地上を結ぶ階段が、同じ階段であっても、地上に出る人から見れば「上り階段」であるが、これから地下鉄に乗る人にとっては「下り階段」であることと似ている。

上の二つの文について言えば、甲と乙のいずれを主語に選んだかによって、文が異なってくる。主語として甲を選ぶか乙を選ぶかは、話し手が、「人」という文字について述べる時、何に**焦点**を当てているかによる。甲に焦点を当てれば「甲が…」となり、乙に焦点を当てれば「乙が…」となる。

このように、話し手の心理過程によって文の構造が変わってくると考える言語研究が、ここ三〇年来、急速に進んでいる。「**認知言語学**」といわれる方法である。時枝氏の「辞——主体の表現——を中心に据えた国語研究（時枝文法）は、認知言語学の先取りといえる。また、時枝氏の国語研究は、認知言語学によって、受け継がれようとしている。【註】

【註】「時枝氏の言語過程説は、「捉え方の意味論」の先駆けとしての意味合いをもつ」（本田啓一、認知意味論、東京大学出版会 2005）

◇「詞と辞の分業」論を超えて

時枝氏の「辞」の再発見は、話し手の主体的表現を日本語の中に見出すための切り口となった。だが、言語過程説に基づく日本語論は、未完成であった。

主体的なものは、いつも、辞によって表現され、それ以外のものでは、表現されないのか。例えば、体現（名詞）の選択の仕方に、主体的な意図が表現されるということはないのか。

時枝氏は「主体的なものは、表現素材を、どのように把握するかということにも表現される」という。例えばある行為を、「罪悪」と表現するか、「失策」と表現するかは、そこに、事物に対するその人の態度を表現することになるのであって、聞き手は、ある場合には、その人を峻厳な人とも見、ある場合には、寛容な人とも見ることになるのである。」

ここでは、辞ではなく詞の選択が、話し手の主体的なものを表現することになる。

時枝氏は言う（国語学原論続編 174頁）。

「国語においては、主体的なものは、辞によって表現されるものであるが、主体的なものは、常に必ずしも、辞という語の形によって、表現されるとは限らない」。

例えば、「彼は私を裏切った。」と言うとき、「語気を鋭くして言う場合と、静かに、もの柔らかに言う場合とでは、…話し手の感情の相違が、その表現における語気に託されていると見ることが出来る」

語気は、言語に伴うものではあるが、非言語の要素である。

非言語が主体的なものを表現することについては、時枝氏は、随所で述べている。

「**「火事」**という文が「火事」という単語と異なるのは、文の場合には、

火事 ■

というゼロ記号■が付いている。

ただし、ゼロ記号は、全くのゼロではなく「何らかの形式すなわち抑揚、強弱等によって表されていると見るべき」という。

時枝氏は、その言語過程説を述べるに当たって、もっぱら源氏物語等の文学作品を題材に取り、会話文を例に取る場合も、実際の会話ではなく、想像の会話文をもって、例としている。そのため、実際のコミュニケーションが、言語と非言語の併用をもってなされている事実、注意が届いていない。せいぜい、抑揚等の音声語に付随する非言語的要素を指摘するに留まり、姿勢、表情、身振り、モノの手がかり、絵画・写真等の非言語的手段については、切り捨てられている。

ところで、時枝氏は、「**詞辞の転換**」ということを述べている。詞が辞になり、辞が詞に転換することがあるというのだ。

「切符の切らない方はおりませんか」の「切符の切らない」は「切符の赤い」と同じようなもので、形容詞の接尾語（詞）と見られる。それに対して、「切符を切らない」の「ない」は否定辞で辞である。このように、同じ「ない」が詞になったり辞になったりする。時枝氏は、このことを「**詞辞の転換**」と呼び、その転換の根拠として、

概念的表現の「なし」は非存在を概念化し、客体化して表現する。それに対して、否定的陳述の「なし」は、非存在を（話し手が）認めることの表現である。と述べている。

ここには、時枝氏の言語分析方法の特徴——話し手の主体（事物の捉え方）を中心に据える——がよく現れている。これこそ、今日の「認知言語学」の方法である。その意味で、時枝言語過程説は、認知言語学の先駆けといえる。時枝氏の未完に終わった日本語分析は、認知言語学によって継承される。どのように継承されるか。それが、次回からのテーマである。

3-3 国語教育の前提としての「言語生活」

「伝達の成立が、聞き手の出生、環境、教養、経験の如何に支配されるとなれば、甲によって表現される思想と、乙によって理解される思想とが、全然、等しくなることがあり得ないということは当然であって、伝達の食い違いを最小限度に止めるためには、甲乙両者の環境、経験をできるだけ同一に近づけるか、相互に、相手の立場を理解しようという寛容な態度を持つより他に方法はないのである。ここに**国語教育の関与する道が生まれてくるのである。**」（時枝誠記、国語学原論続編、35-36 ページ）

時枝氏は、言葉が個人の行為であるとすれば、話し手・聞き手のさまざまな「言語生活」の解明こそが、言語の解明となると考え、言語生活の解明が、国語教育の前提であると考えた。

時枝氏は、言語行為の四つの形態（話す、聞く、書く、読む）と、生活の四形態（衣食住、社交、政治、教養）を掛け合わせて、下の表のように、「言語生活」を分類した。ただし、生活は、ここでは「一般社会人」の生活であって、

「特殊な職業人の言語生活というように区別してみれば、…小説、評論家の言語生活、学者の言語生活、農夫や炭坑夫の言語生活…異なった言語生活を営んでいることは明かである。「言語生活の個別性を明らかにすると共に、あらゆる生活に通ずる最大公約数的言語生活を科学的方法によって、見いだせるならば、それは、義務教育における国語教育の内容

生活 言語		一般社会人				
		衣食住	社交	政治	教養	
音声 言語	聞く	談話	○	○		
		講演			○	
		討議				
		その他				
音声 言語	話す	談話	○			
		講演				
		討議				
		その他				
文字 言語	読む	論文			○	○
		小説		○		○
		手紙				
		その他				
文字 言語	書く	論文				
		小説				
		手紙		○		
		その他				

内容を決定する上に、重要な参考資料とすることが出来る」

と述べている。

今日ならば、携帯でメールをやりとりするとか、インターネットに書き込むとかを抜きにしては、若者の言語生活は、語れない。時枝氏がこの本を出したのは、昭和30年（1955）であるから、テレビはないが、ラジオは普及していた。

「ラジオを聞く」というのは、「その他」に入っているのだろうか。新聞を読む、というの、どこに入っているのだろうか。等と考えていくと、この表は、抜けているものばかりである。時枝氏が、それを承知で、敢えてこの表を載せたのは、なぜだろうか。言語生活の実態を分析するところから言語政策や言語教育を考えねばならぬ

いはずなのに、今までだれもそれをしてこなかった——こうした言語学者や国語政策担当者の怠慢への批判が、時枝氏にしては杜撰な表の掲載に、込められていると、私には思える。

こうした時枝氏の批判を真摯に受け止めるならば、われわれは、ろう学校の言語指導の目標を策定するに際して、日本の社会人および特に、日本の成人聴覚障害者と在学中の聴覚障害児の言語生活について、その実態を明らかにせねばならない。ろう学校の教員は、ろう学校にいる児童生徒の言語生活についてさえ、十分につかんでいるとは、言い切れない。

聴覚障害者の言語生活は、聞こえる者の言語生活と共通する面が大きい、異なる面も、かなりある。聴覚障害者は、音声語、文字、手話、指文字等、さまざまなモードの言語を相手によって使い分ける。手話通訳、要約筆記通訳、字幕、といった独特の要因も入って

くる。

コミュニケーションにおいて言語の果たしている役割は、コミュニケーションの仕方によって、大きく異なる。次の a～f の順に、非言語的手段は少なくなり、言語だけのコミュニケーションになる。話し言葉と書き言葉の最大の違いは、書き言葉にあっては、非言語的手段が（図やイラストを除いて）基本的に排除されることである。

- a 対面の会話 [声も身振り・表情も、物も使える]
- b インタフォンまたはテレビ電話による会話 [声と顔の表情が使える]
- c 電話 [声だけ使える]
- d 筆談または携帯メールによる会話 [文字による対話]
- f 手紙 [文字による一方通行の伝達]

聴覚障害者と聴覚障害児の言語生活の実態を見ることは、ろう学校の言語指導にとって、欠かせない。時枝氏にならって、敢えて、不十分を承知の上で、成人聴覚障害者の言語生活の実態をつかむための表を提示する。